日本文学全集
22

# 川端康成

ある人の生のなかに・山の音・千羽鶴
雪国・伊豆の踊子・十六歳の日記

河出書房

# 川端康成

カラー版日本文学全集　22

1967©

昭和四十二年七月二十日　初版印刷
昭和四十二年七月二十五日　初版発行

定価　七五〇円

著者　川端康成
発行者　河出朋久
印刷者　草刈親雄
装幀者　亀倉雄策

本文印刷　中央精版印刷株式会社
口絵印刷　凸版印刷株式会社
製本　加藤製本株式会社
製函　加藤製函印刷株式会社
本文用紙　本州製紙株式会社
クロース　日本クロス工業株式会社

発行所　株式会社　河出書房
東京都千代田区神田小川町三丁目六番地
電話　東京(292)三七一一(大代表)　振替　東京一〇八〇二

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目次

川端康成

ある人の生のなかに……五
山の音……一一五
千羽鶴……二三九
雪国……二九九
伊豆の踊子……三五七
十六歳の日記……三七三

注釈　保昌正夫　三八七
年譜　四〇一
解説　佐伯彰一　四〇九
色刷口絵　榊原和夫
色刷挿画　高山辰雄
ある人の生のなかに・千羽鶴・山の音・雪国・伊豆の踊子　森田沙伊

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

川端康成

# ある人の生のなかに*

## 一

御木麻之介*は、夏は五時に起き、冬は七時に起きる。春秋はその中間と思えばいい。四十過ぎから、体がしっかり固まった感じで、真冬も六時に起きていいのだが、それでは、娘のやよいや、離れにいる嫁の芳子に迷惑だと、早起きをひかえている。

御木は毎日の時間を、規則正しく使いわける習わしだ。午前は自分のため、午後は他人のため、そして夜は休息と娯楽の時間である。午前の仕事と勉強、その自分のための勉強を夜もすることがあり、他人のための用事が他人の都合で、夜におよぶこともないではないが、夜はなるべくあけておく。

睡眠中の時間は、なんと言えばいいか、多少は疑問にしても、他人とのつながりを失っているのだから、御木自身のための時間であろう。あるいは自分のために、最も純粋で貴重な時間なのかもしれない。眠っている時は食いものもはいって来ない。外からはいって来るものは、呼吸の空気だけである。

しかし、自分の意識も失われている。またしかし、子供は寝ているあいだに育つというように、健康な睡眠から目ざめた時の御木は、四十八歳の現在も、寝ているあいだに育ったような気がする。肉体はもはや発育しないにしても、精神が昨日よりも発展したような気がする。

睡眠中の精神について、御木は心理学的にも生理学的にも深くは知らないが、学者の調べをいつかはよく知りたいものと思っている。睡眠中の精神というと、夢*が一つの手がかりになりそうだけれども、夢は眠りの純なさまではない。

夢とはなんであろう。

たとえば、御木の近ごろの夢の一つ。――アメリカの艦載機から機銃掃射を受けて、あれっと見る目の前の畳に、ぶすぶすと一列の穴があいた。御木の寝床から一尺と離れないところだ。夢のなかでは恐怖を感じたが、目ざめると、それほど恐怖は残っていなかった。そして夢のなかの恐怖にも、おかしな矛盾があった。

御木の家は東京の旧市内のなかで、幸い戦火に焼かれていない。屋根瓦も屋根裏も戦後のたいていの家よりはしっかりしている。そのせいか、夢のなかの御木は、うちの屋根なら、この機銃掃射でも、蒲団にはいっていればまず安全だろうと思って、寝床に横たわっていたようだ。しかし、弾丸が屋根を貫くのを見ながら、そう思うのはおかしい。あとで理屈をつければ、畳と蒲団との問題で、畳には穴があいたが、綿のはいった蒲団は通らないかもしれぬ。

夢のなかでは、そんな理屈はなかった。ただ屋根と蒲団で安全だろうと思っていた。かりに安全だとしても、首を出していたのはおかしい。頭もかけ蒲団のなかにかくさねばならないはずだ。また、自分の家の屋根が比較的しっかりしているというのも、その焼け残った家と戦後の家とをくらべての考え方で、戦争中では、御木の家の屋根など、普通のものに過ぎなかった。機銃掃射を受けた時に屋根がしっかりしていると思った、夢のなかの時間には錯誤がある。過去の出来事と現在の考え方とがいっしょになっている。

じつは過去の出来事でも現在の考え方でもなかった。御木の家は機銃掃射を受けたことなどない。御木は戦後にもうちの屋根の堅牢さを特に考えたことなどない。二つとも夢のなかで初めて経験した。

夢の前半と後半とにも矛盾があるというか、連絡がない。わりにおぼえているのは後半の方だ。機銃掃射は夢のはじめから終りまでつづ

いていたが、畳に穴があいたり、寝床に横たわっていたりは後半で、夢の前半の御木は、機銃掃射のなかを、娘のやよいと二人で逃げまどっていたようだ。防空壕ではなく、掘割の岸らしいのを、その上に出たり下にかくれたりして、ひとところに落ちつかなかった。岸には葉の貧しい柳がならんでいたようだ。それがいつどうして、うちの部屋で寝床に一人寝ていることになったのかまるで連絡がない。

掘割の岸ではやよいと二人だった。ほかの家族はいない。うちではまったく御木一人が寝ていた。家族の影も見えない。その空襲の夢に、家族のうちでやよいだけが現われたのは、戦争のころ、女の子という点からも年の点からも、御木はやよいが一番気がかりだったせいかもしれぬ。しかし、やよいは現在の年で、十年前の空襲の夢に登場した。

楽しい夢ではない。ただ、今度の戦争を知らない昔の人は、空襲の夢は見なかっただろう。低空飛行の艦載機から機銃掃射される自分は、とにかく戦争に遭って来た人間*だと、御木は目がさめてから思った。楽しい夢でないせいか、この夢のなかで、御木はひとこともものを言わなかったようだ。

それとちがって、昨夜見た夢などは、見知らぬ人と会話したし、駄じゃれの落ちまでついていた。

町か村かわからぬが、田舎道である。片側に人家がまばらだ。家と家とのあいだには木立もある。それぞれの家の庭木か柿の木畑かもしれない。反対の片側は小山の裾である。道端へかぶさるように、山の木が緑だ。その山裾を少し切りこんで、古い井戸がある。形ばかりの屋根の板が朽ちかけている。柱は二本で、つるべの棕櫚縄がさがっている。御木が現には見たことのない景色だった。また、なぜこんな田舎道を通りかかっているのかもわからなかった。

通行人もまばらにはあった。野ら帰りの人たちのほかに、旅人らしいのも見えた。ちょん髷のある時代まではさかのぼらないが、今よりはだいぶん古い旅姿である。洋服など着ていない。田園風景にふさわしい通行人を、御木は夢のなかにえらんだのかもしれぬ。御木自身はなにを着ているのか、夢のはじめのうちは、自分の姿は見えなかった。御木はただ見る人であった。

一人の男が井戸のそばに立って、屋根の方をじっと見上げていた。その男の年ははっきりしないが、白毛が少しまざっていたようだ。夢のなかの配役から言っても、その男は中年過ぎでなければならない。あまり老年でも困る。顔つきも体つきも、素朴で穏和で善良である。お人よしであり、のんき者だが、愚かではない。やさしく温かい愛をこめて、ゆったりと屋根の方を見まもっている。その姿に御木は心ひかれて、井戸端に近づくと、親しみをこめてたずねた。

「なにを見てらっしゃるんですか。」

「小鳥の巣の番*をしてやっています。雛がいるんです。」

「ああ、そうですか。」と、御木はうなずいた。

そう聞けば、親鳥が屋根のあたりに飛びかえり、雛鳥が鳴き立てて、赤い口を開きながら餌をもとめた、その哺育のさまを、御木も歩いて来ながらたしかに見ていたのだった。親鳥が飛び帰り、飛び去り、また飛び帰るのを、二度も三度も目にしていたのだった。しかし、そこにも夢のおもしろさがあった。その男に聞くまで、夢のなかの御木は親鳥も雛鳥も見てはいないのである。ところがその男に聞くと、見ていたことになってしまった。ごく自然に過去が変えられてしまった。

御木はなごやかな感じで、その男とならんで立ちながら小鳥の巣を見上げた。たずねては見なかったが、その男は一日じゅう小鳥の巣を番してやっているのだと、御木には自然とわかっていた。井戸には水を汲みに来る人もあって、巣のすぐ下で、二つのつるべを上下にたぐるにつれて、車のきしる音もする。しかし、その男が立っていると小鳥たちは人を恐れない。また、その男は通る人や子供のいたずらから

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

も、毎日こうして小鳥を守っている。御木はその男の生き方と一つ心になって、その男に尊さに近いものを感じる。小鳥はなにか霊鳥のようである。夢のなかの御木は、親鳥のつばさの色も模様もはっきり見えて、なんとかいう雀だとわかっていた。地味な色あいの羽毛だが、鮮明で精巧な模様である。目ざめてからもおぼえていた。しかし、がらの類いにそのような小鳥はいない。架空の鳥である。

その男と小鳥の巣を見上げていたところで、夢の古井戸の場面は消えて、夢の舞台は一転した。今度は自分の姿が御木に見えた。

御木は白い豚の子を五頭、両腕で腹にかかえて、アスファルト道を歩いていた。やはり田舎道だが、片方は田圃、片方は小松林で、松の向うには海があるらしい。松は胸までもないから、その向うに海が見えるはずで見えない。子豚は五頭抱いて歩くのは、なかなか難儀である。現実では不可能かもしれぬ。果して御木は一頭を腕からすべり落した。落ちた子豚はアスファルトの上にのびてしまった。頭を打ちつけて、死んだようだ。目をつぶって、足をのばし、少し硬直している。御木はふと思いついて、子豚の胸や背や腹を両手でいそがしくこすった。冷たい子豚の体があたたまって来た。頭が少し動き、短いしっぽがくるくる動いた。子豚は生きかえった。

御木はよろこびにあふれ、また五頭の子豚をしっかり腕にかかえて歩き出した。落ちた子豚の手あてのあいだ、ほかの四頭の子豚は消滅していたのに、蘇生した子豚を抱きあげると、ほかの四頭の子豚も御木の腕のなかに、忽然と出現していた。

少し歩いてゆくと、小松林の側に小さい小屋があった。あら壁のままだ。窓はない。海に向った方に入口があるのだろう。落ちた子豚がまだ弱っているのに心痛めながら歩いて来た御木は、その小屋の影を踏んだとたんに、

「そうだ。パン・ブタンを呑ませばいいんだ。」とつぶやいた。自分でつぶやいたのだが、なにものかの智慧の声が教えるのを聞いたかのようでもあった。

そこで目がさめた。御木はおかしくて笑った。

パン・ビタンという日本製のビタミン総合剤があるはずだ。夢のなかで、それを「パン・ブタン」ともじったものらしい。夢のなかのせいか、御木はじょうだんではなく、大真面目だった。目がさめると、夢でも駄じゃれが出て、その駄じゃれの落ちで夢のやぶれたことが、御木は愉快だった。

今日は頼まれ仲人をつとめることになっているので、雛鳥といい、子豚といい、めでたい吉夢だった。披露宴の媒酌人のあいさつに、夢の話を入れようかと御木は考えた。巣のなかの雛の数はわからなかったが、やはり五羽はいただろう。しかし五人の子供を生めと望むのは、今の人口問題から言って、多過ぎるだろうか。いや、あのように明るく結婚をよろこんでいる、今日の花嫁の公子には、仲人の夢占いで、五人の子供が出来るとしゃべってもよさそうである。

御木は朝湯に温まりながらも、「パン・ブタン」を思い出して笑っていた。

湯からあがると、女性ホルモンの注射液の管を切って、手のひらに受け、頭の地肌にすりこんだ。今朝は誰もそばにいなくて、笑う者もいない。また、このごろでは家族も見なれたので、はじめほどおどろきもおかしがりもしない。

女性ホルモンが毛髪にきくと聞いたのは、築地のふぐ料理屋の老女中からだった。禿げをとめるために、男も女性ホルモンの注射液を頭の地肌にすりこむという話だった。御木もびんが禿げあがりかかっているので試みようと思った。

女性ホルモンであるだけに、家族にもなんとなくはにかみを感じて、初めて試みる時は家じゅうにしゃべっておいた。妻も娘も息子の嫁も鏡台のまわりへ見物に集まって来た。妻の順子はおかしがった。娘のやよいはいやらしがった。御木は三人が見ているなかで、注射液

をすりこみながら、
「このごろの若い女*はビイルで髪を洗ったりするんだって……？」
と、やよいの方を見た。
「そうですわ。」
「知っているのか。」と、御木は少し気が抜けたが、
「僕はしらなかったね。からすの濡羽色というような、黒光りする髪は、今じゃむしろ困るんだってね。」
「そうですわ。こころもち赤い方がやわらかい感じだし、洋装に合うんでしょう。ビイルで洗うとくさいから、オキシフルを少うし入れると、ちょうどいい色になるんです。入れ過ぎると、赤くなり過ぎて、わざとらしいわ。」
「それも聞いた。」と、御木は答えたが、ふぐ料理屋の老女中からものめずらしく聞いて来たことは、やよいがみな知っているので、話しがいがなかった。
「やよいもオキシフルを入れるの？」
「私は毛がやわらかいし、黒くもないんですもの。」
女の黒髪もいつのまにか移り変っているのを、御木は小説家でありながら、うかつにも確認はしてなかったわけだ。しかし、ふぐ料理屋の女中と自分の娘とに教えられたあとでも、確認はしたくないようだった。
そののち、女性ホルモンが禿止めにきいているのかどうか、使いはじめてからまだ一月あまりなのではっきりしないが、週に二三度ずつすりこんでいるうちに、家族たちもなれて、見て笑うほどの興味もうせたらしかった。
今日の花嫁のさとは炭坑主で福岡に住んでいる。花婿の家は新潟である。花嫁と花婿とは同じ大学にまだ在学中で、恋愛結婚をするのだった。東京で式をあげて披露をし、新潟で披露をし、福岡で披露をし、つまり披露が三度のわけだった。よけいな贅沢だと御木は思うが、一人娘を嫁にやる親にしてみると、福岡でも披露がしたいらしかった。花嫁の町で披露をするにつけては、花婿の町の新潟でも披露をしなければならないと、花嫁の父の大里は考えたものとみえる。花婿の家は新潟での披露の費用を半分持つだけで、東京での婚礼、福岡での披露の費用は、いっさい花嫁側の負担と、御木も大里から聞いていた。新夫婦の生活費も公子の持参金でまかなわれるのかもしれなかった。花嫁の家も地方の財産家であったらしいが、戦後は逼塞した。
石炭だとて近ごろはひどい不況にしても、炭坑の大きい赤字にたいして、婚礼の入費などは問題でないのかもしれない。
「二人とも学生で、早いんですが、まあ少しのことがしてやれるうちにと思いまして……。」と、大里は御木に言ったような事情もあるのかもしれない。
御木に仲人ということも、大里の方から頼まれたのであった。大里一家は公子の婚礼のために、親戚を加えて上京して、本郷の旅館に泊っていた。式は三時だが、娘と別れの昼飯も共にしてほしいし、娘にもいろいろ話してやってほしいし、午前十時ごろ宿に御足労いただけないかと、大里から言われた通りの時間に、御木は出向いた。御木の妻の順子は髪を直しに美容院へ寄るので、途中で別れた。
「美容師でしたら、宿へ来ておりますのに……。花嫁ばかりじゃなく、私たちもこれから……。」と、大里の妻は言った。御木はいかにもと思った。御木が部屋にはいって来た時、公子は花婿の下宿に電話をかけているところだった。
「そう？　お目ざめになってたの？　感心だわ。十時に電話でお起しするって、お約束でしたから……。」と、公子は可愛い声で話していた。
「三時まで、することがないって……？　こちらへいらしてたらどうなの？　そうなさった方がいいわ。向うへおくれてらっしゃるようなことになると、私はいやですもの。」

公子の母は御木の方を見て、これですからという顔をして見せた。
「ゆうべ……？　はい、よく眠れました。眠り薬を飲ませられたの。父も母も飲みました。」
「これ。」と、母が公子を呼んだ。公子は振りかえって、
「あら。御木先生もいらして下さってるわ。波川さんもこちらへ来てちょうだい。きっとね。なるべく早く……。」
公子はまだ宿屋の丹前に細帯を巻いたまま、しかも坐らないで、腰を浮かせた恰好で、電話にかかっていた。髪のウェエブを寝みださぬためにか、頭にはなにか黒いきれを巻いていた。
電話を切ると、ちょっと手をついて、
「お早うございます。」と、御木におじぎをして、部屋を駈け出して行った。その背の高いうしろ姿が生き生きとしていた。そう美人ではないけれども、顔が小さく、立居の動作が明るかった。
「婚礼の朝、花婿さんに電話をかける娘がございましょうか。昨夜も一昨夜も、花婿さんがここへ遊びに来て、おそくまでにぎやかに話してるんですもの。私は宿の人にもきまりが悪くて、困りましたわ。」と、公子の母は御木に言った。
「三年越しだもの。」と、大里は言った。
「恋愛結婚はいいですね。花嫁さんに少しの不安もなさそうで、楽しそうです。」と、御木は言った。
「不安がないんじゃなくて、公子にはなにもわからないのですわ。もともと父親にあまえていた子が、お嫁にゆくとなると、なおあまやかされて、いい気なものですの。」
「私がここにいると、お嬢さんがお困りじゃないんですか。」と、御木は言った。
「いいえ。お化粧や着つけの部屋は、別に取ってございますから……。」

## 二

人生に起伏は誰しもまぬがれがたいが、御木は不運の時というものを信じない。自分の四十八年の間に、不運である時はなかったと思う。最悪らしい時には最も旺盛に仕事をする習癖がついていた。つまり仕事に集中することによって抵抗をするわけで、後から振りかえると、最良の年になっていた。
仲人として新郎新婦におくる言葉には、そのようなことも言いたいが、具体例を話さぬと力がないと考えながら、いい例は浮かんで来なかった。また、いい例は自慢話と受け取られそうだし、御木自身も自慢話のつもりを全く無しには言えそうにない。そして迷っていると、婚礼の席のせいか、妙な一例が浮かんで来た。
昔、御木は結婚の二月ほど前に相手の順子から、純潔を失っていると告白された。順子は十九、今のように満で数えるとまだ十七歳だったし、また一年近い交際のあいだに、そのような気配はなかったから、御木は勿論順子の純潔を信じていた。
御木は打撃をいやすために、あるいは妄念を払うために、仕事に打ちこんだ。その時の作品は幸い成功した。
ところが結婚のその夜、順子は純潔のしるしがあった。御木ははじめて順子が純潔を失ったという事情を問いただした。それまでは説明をもとめなかったのである。よけいなことを聞いたところで、よけいな想像がなまなましくなるだけだし、よけいな記憶がこびりつくと思ったからだ。そのかわりに御木は自分の作品を責めたようなものであった。
そうした結果は、作品の成功という幸いがあった。順子の純潔の半ば失われていたことが、御木の幸運のもとになったなどとは勿論言えないけれども、順子に詰問しなかったことが、御木に幸運をもたらしたとは言えるのかもしれない。

すでに息子の嫁をもらい娘が年ごろとなった今では、昔そのことでよけい苦しんだ順子の方が、そのことをよけい忘れているらしくも見える。披露宴で仲人の席にいる御木は、あいだに新郎新婦をへだてた妻の様子をうかがおうとして、テエブルに少し乗り出すと、花嫁をながめるような恰好になった。

順子が小さいコップの日本酒を半分に足りないほど飲んで、ぽっと頬に出しながら放心しているのに、御木は微笑した。花嫁が自分に微笑されたものと思ったのか、下うつ向くと、目の端で明るく、人には気づかれぬほどの微笑を御木にかえした。花嫁は料理の鶏にナイフを使って、小さく切ろうとしているところだった。おかどちがいの微笑の返しが御木はおかしくなって、

「波川さん。」と、花婿を呼んだ。

「あなたは大学生の服を着て来ると、おもしろかったね。しかし、花嫁には女子学生の制服はないかな。」と、あらぬじょうだんを言った。

「ありませんね。女の方が服装は自由なんです。男の学生だって、紺の詰襟に、学校の徽章つきの金ボタンでなくても、いいはずだと思いますが、男学生の方が旧来のしきたりにしたがってるんですね。」

「新婚旅行も背広……？」

「はあ。新調しました。学生服の新婚旅行なんて、宿屋にも変な目で見られるでしょう。」

「変な目で見られるのも、楽しみだな。」

「僕は学生服で式に出たって、かまわなかったんですよ。しかし、お客さんはみな笑っちゃうでしょうね。学生服は相当くたびれてますから……。」

東京、新潟、福岡の三カ所で披露をしようという、花嫁がわの大里家では、くたびれた学生服の花婿など困るだろうが、波川が学生服で押し通したら、ほんとうにおもしろかったかもしれないと、御木は考えてみながら、東京、新潟、福岡と「仲人の巡業」をさせられる御大層らしさに、軽い皮肉を仲人のあいさつのうちにもらしたいような気もした。

波川は学生だから、今日としては先ず早婚のうちであろう。御木自身も息子の好太郎も早婚の方であった。しかし、波川と公子とのように同じ大学の学生同士で結婚して、結婚後も共学をつづけるのは、御木にはめずらしく思われた。花嫁の親から頼まれての仲人だから、「三年越し」という二人の恋愛については詳しく知らないが、二人の様子でかなり前から深入りしているらしいことは察しがついた。花嫁の公子ははにかんでもいるが、遊びの楽しさというようなところも見えた。

御木は仲人のあいさつに立ちあがると、向うの隅のテエブルに、男女の学生らしいひとかたまりが目についた。新郎新婦の友だちなのだろう。

あいさつの終るのを、ボオイがうしろに待っていて、御木の椅子を押してくれながら、

「御面会の方がお見えになっています。」と、耳もとにささやいた。

「僕に面会……？」

御木は思いがけなかった。

「なんという人……？」

「石村さんとおっしゃる方だそうです。」

「石村……？」

御木はとっさには思いあたらなかった。

「男の人か女の人か。」

「さあ、私は玄関からの取りつぎを受けましただけで、わかりませんが……。」

「そうだな、これから来賓の祝辞がはじまるんで、仲人は席を外せないと言って、用事を聞いて来てくれないか。」

ボオイが間もなくもどって来た。

「玄関で待たせていただきますとのことです。ぜひお目にかかりたいそうですが、どういたしましょう。若い娘さんです。」

ボオイが「お嬢さん」と言わないで、「娘さん」と言うからには、おそらく風体がよくないのだろう。

それにしても、今日この時間、波川・大里両家結婚披露の席に御木がいると知っているのは、家人のほかにはほとんどない。石村という娘は御木の家をたずねて、ここを聞いて来たとしか思えない。御木は仕事の関係で客が多いから、家人も客なれしていて、留守中の客に御木の出先を教えることなどは滅多にない。

「石村、石村……。」と、考えているうちに、御木はいつか聞いた名前のような気がして、はっと行きあたった。妻の順子が純潔をうばわれたと思った、その相手の男がたしか石村であった。順子の親戚だが、御木と結婚してからはつきあっていない。

新婚旅行の夜、順子が告白したところによると、石村の主人が死んで、順子は通夜の手つだいに行っていた。石村の息子は二日間ほとんど眠っていないということで、順子は娘らしい思いやりから、二階の納戸のたんすのあいだに床を取って寝ることをすすめた。ふとんの両端がたんすにつかえるように狭い場所であった。息子は不意に順子の手を取って引き寄せた。順子は声が出なかった。夜なかの三時過ぎだったので、順子は帰れもしないし朝まで働いていた。順子は石村の息子をきらっていたわけではなかったが、父の通夜にそのようなことをしたので、その人に恐怖と憎悪を感じるようになった。

肉親の死んだ時などは、かなしみとつかれとから、かえってそういう衝動が高まったり、自制を失ったりすることもあり得ると、御木がわかるようになったのは、ずっと後年である。順子も疲労と同情とで、息子をそそるようなゆるみがあったのかもしれない。としても、順子からはじめてそれを聞かされた時は、父の通夜にと、ひどく驚いたものだ。しかし、石村がそんな乱暴をしなければ、順子の感傷の同情は愛情に深まって、結婚するようなことになったのだろうかとも、御木は思ってみたのを今もおぼえている。

その石村の娘がなぜ御木に会いに来たのだろう。御木にでなくて、妻に会いに来たのかもしれぬ。もしそうならボオイが順子に取りつがないで、御木に取りついだのは幸いだ。

新郎の友だちの学生で、予定の祝辞が片づくと、御木は立って行った。

石村の娘はボオイにも「娘さん」と言われるほど身なりが悪かった。出がけに髪の手入れをして来たとみえて、それがきわだって見えた。目に力がないが、顔立ちはよかった。十七八であろう。

娘は御木と思ったらしいが、

「御木ですが……。」と、御木が名乗るまではだまっていた。

娘は手紙を渡した。封筒の表にも裏にもなにも書いてなかった。御木がもしやと思った通りで、金の無心だった。石村は結核で長いこと寝ているらしく、「命旦夕に迫り」というような言葉が使ってあった。娘も感染しているのではないかと御木はふと思って、娘の力ない目を見ながら、

「ちょっとこちらへ……。」と、広間の方へ誘った。

「おかけなさい。」

「はい。」

大きい革椅子に娘はおずおずと坐った。色白の細く長い首をうつ向けて、形のいい唇*だった。

順子が自分と結婚しないで、もし石村と結婚していたら、この娘を産んでいたのだという妙な同情を御木は感じた。そんなはずはない。この娘には順子とは別の母親がある。順子が石村と結婚していたところで、この娘とは別の子を産んでいたはずだ。

御木の妙な同情はどこから来たのだったろう。

「お母さんは……？」

「はい。」
「お元気なんですか。」
「母は今うちにおりません。」
御木は石村を見たこともない。新婚旅行の後、石村の噂を妻から聞いたこともない。その石村の妻が「お元気ですか」もないものだ。石村の家庭の事情などたずねることもない。
御木は持ち合わせの金を出して、石村の封筒に入れた。「すみません。」と、受け取ったところをみると、娘は金の無心と知って使いに来たのがわかる。石村は金の無心によこすのに、御木夫婦のことを娘になんと言ったのだろうか。多分、親戚と言ったのだろう。あるいは順子を昔の恋人とでも言ったのだろうか。二つとも無根ではないが、御木たちは金を無心される筋はないようだ。石村の手紙には「御木様」とあるだけで、麻之介とも順子とも書いてないから、石村が麻之介に渡せと言ったか、こっそり順子に渡せと言ったかはわからない。順子にしても、石村の父の通夜の出来事によって、将来金を無心されるような親戚の縁は切れているはずだが、窮した石村はその出来事を無心の種に思い出したのだろうか。いずれにしても、無心に来られてみると、石村が御木夫妻にとって赤の他人でないようなのは、おかしなことだった。
御木は椅子にかけたまま、石村の娘が立ってゆく後姿をながめていた。無心は当然こわるべきだったという、いやな後味が残った。
披露の席にもどると、順子はコオヒイの砂糖をスプウンで掻きまぜていて、
「花婿さんはコオヒイをお砂糖なしで召しあがるのが、お好きなんですって……。それで花嫁さんも、お砂糖を入れようかどうしようかと、迷ってらっしゃるのよ。」と、花嫁の胸の前へ首を出して御木に言った。
「あら。迷ってなんかいませんわ。私はいつもお砂糖を入れていただくわ。波川さんは気取ってますのよ。」と、花嫁が言った。
順子は夫の妙な表情に気づいて黙った。
御木は新郎新婦を促して立たせた。新郎の両親が寄って来て、御木夫妻に礼をのべてから、
「駅には、二人の学校友だちだけに送ってもらうことにしましたが、いかがでしょう。」
「若々しくて、結構ですね。」と、御木は答えた。
御木夫妻が車に乗ると、テエブルを飾っていた花の花束を、新婦の母親が順子に渡した。
玄関に出迎えた嫁の芳子が、その花束を受け取った。
「まあ、きれい。」と、ばらの匂いをかぎながら、
「おつかれになりましたでしょう。」
「そうでもないわ。結婚式っていいものね。だけど、新潟と福岡まで引っぱってゆかれるのは、少しおっくうだわ。その土地に、お仲人を頼みたい方もいらっしゃるでしょうに、そうしていただけないかしら……。」と、順子は御木を見た。
「そうはことわってるんだがね。御木夫妻の媒酌によりと、通知を出したからと言うんだ。順子は新潟も行ったことがないし、まあ見物のつもりで……。」
「私たちの旅費だって、大里さんが出すとおっしゃるんでしょうね。心苦しくて、見物などしていられませんわ。北九州の炭坑夫*が困っているのは、うちのテレビでも見ていますでしょう。派手な披露なんぞ東京だけになさっとけばよろしいのに……。」
「そうだね。」
順子は隣りの部屋へ行って、脱いだものをたたんだ。芳子が手つだった。御木の着がえはやよいが世話をした。御木は石村の手紙をポケットから出してまるめると、捨て場に迷った。石村の娘の取次ぎに出たのは、芳子だろうか、やよいだろうかと思いながら、

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com